

# 第12回「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」 入賞者企画実施報告書

## テーマ「ラオス・カンボジア・インドネシアで体験したいこと」

### ① 浅見 真奈美（東京海洋大学 海洋科学部 海洋環境学科）

実施国：インドネシア

テーマ：「海」から学ぶインドネシア文化の発信

内 容：インドネシアの人々の生活の原点である海。「海」文化で栄えてきたスラウェシ島を訪れ、見て触れて感じて、現地の人々とコミュニケーションをはかることで、生活・歴史・文化について学ぶ。帰国後、取材をもとにインドネシア新聞を作成し、母校や自分が参加している団体などに配り読んでもらうことで、インドネシアの文化を知る機会を多くの人に持ってもらおう。

[実施報告 PDF](#)



スラウェシ島、タナ・トラジャ  
舟形の伝統家屋「トコナン」

### ② 安藤 蘭（東京大学 文科一類）

実施国：カンボジア

テーマ：カンボジアで性売買の実態を学ぶ

内 容：人身売買の実態などの指導、識字教育、職業訓練などが行われている施設にてお手伝いをしながら、カンボジアにおける性売買の現状の把握と、それに対する現地の草の根活動の実際を学び、性売買抑制、廃絶に向けて取り組むにはどうしたら良いのか、当事者意識を持って考える。

[実施報告 PDF](#)



SCSA (Save the Children's Smile Association)訪問

### ③ 篠田 湧（東洋大学 国際地域学部 国際地域学科）

実施国：ラオス

テーマ：ラオスの農村から“エシカル・ライフ”を学ぶとともに、  
開発と幸福の関係性の調査の実施

内 容：かつての日本にあったような、質素であるが豊かさにあふれるラオスの農村での暮らしの中で自然との調和・共生という生き方の価値観である「エシカルライフ」を体験し、開発と国民の幸福度は果たして一致するのであろうかという疑問をラオスの農村部の調査で明らかにしたい。

[実施報告 PDF](#)



幸福度調査アンケート調査の様子

### ④ 源 飛輝（東京大学大学院 総合文化研究科）

実施国：インドネシア

テーマ：インドネシア人に対する日本語教授・日本文化の紹介～私服の外交官として～

内 容：アジア地域化が叫ばれる今日、インドネシアが日本にとって 21 世紀の重要なパートナーであるが、在日インドネシア人に比べ在留法人数はいまだ少なく、両者間に互いの関心に対しての需給格差がみられる。企画者は自らの対外国人の日本語指導・教授の経験を活かし、草の根で言葉や日本文化を紹介する国際交流を行う予定。

[実施報告 PDF](#)



Syuhudul 氏にバンジャルマシンの  
建築方法について教えてもらう

### ⑤ 宮崎 響（上智大学 総合人間科学部 教育学科）

実施国：インドネシア

テーマ：“インドネシア・バンジャルマシンのイスラームと精霊信仰の関係”  
—中東・北アフリカ・日本との比較—

内 容：2012 年度から休学して世界の宗教、精霊信仰を身をもって体験しに行く予定。その旅の最初の国としてインドネシア、カリマンタンのバンジャルマシンを選び、1.バンジャルマシンのイスラームと精霊信仰の関係性、2.中東・北アフリカとのイスラームとの比較—信仰・自然環境の観点から、3.日本の精霊信仰との比較—東日本大震災を経験して—を目的に、日本と比較し、内的な面から日本を考える。

[実施報告 PDF](#)

# 「海」から学ぶインドネシア文化の発信

東京海洋大学 海洋科学部 2年 浅見 真奈美

実施国 インドネシア

実施期間 2012年2月23日～3月12日(19日間)

2月23日～2月25日 出国&バリ島

2月25日～3月7日 スラウェシ島

3月7日～3月12日 ジャワ島&帰国

## 目的と方法

海文化で栄えたインドネシアのスラウェシ島を訪れ、ツアー参加や現地の人と交流することで、現地の生活や文化に実際に触れる。日本にとっても身近な海に焦点をあて、インドネシア文化を知る。帰国後、現地で学んだインドネシアの文化についての新聞を作成し、より多くの人々に読んでもらう。

インドネシアは多島国であり、海と深くかかわりを持っている。「海」を視点してインドネシアの文化に触れるのはどの島でもよかったが、貿易で栄えた漁港や舟形の伝統家屋がたくさん残る島に魅力を感じスラウェシ島を選んだ。スラウェシ島へは日本から直接飛行機で行くことができないため、バリ島のデンパサールで降りて、国内線でスラウェシ島へ向かった。帰りは国内線からジャワ島のジャカルタへ向かい5日間滞在して日本へ帰国した。

## 1. スラウェシ島、マカッサル



マカッサルは、スラウェシ島で最大規模の漁港の町である。漁港には船がぎっしり、どうやって船を出すのかと思うくらいだった。魚市場ではたくさんの魚やイカ、エビが売られていた。この町の人々に何がおすすめ？と聞くと、シーフードやサンセットと返ってきた。またオランダの植民地下にあったこともあり、オランダ調の建物も残っていて、面白い町だった。

## 2. スラウェシ島、タナ・トラジャ



舟形の伝統家屋「トコトナン」があると聞き訪れたトラジャ。周りには海はなく、美しい田園が広がっていた。なぜ舟形かというと、ご先祖様が中華から移民してきたと信じているからであった。トコトナンの美しい模様には「波」がモチーフにされたものもあり、これは子孫が海を越えて繁栄するようにと願ったものであった。この村の人々のお葬式にも参加させていただいた。たくさんの牛・豚を殺し、それらが故人を次の世界へ運んでくれるという盛大な式であった。他よりも祖先を尊う気持が強いと感じた。皆フレンドリーでとても気持ちがいい村だった。また行きたい。

### 3. スラウェシ島、マナド



マナドはマカッサルにつづく漁業の町。インドネシア各地、海外も結ぶ大きな港がある。海洋学者がマナドの魚市場を訪れたとき、たまたま深海魚のシーラカンスが揚がっていたことで有名になったのもあり、シーラカンスの像があった。マナドの大学生によると近年都会化が進んでいるという。マカッサルもそうであったように、海が近くにあり大きな港が近くにあると町が栄えるのだろう、と思った。

### 4. スラウェシ島、ブナケン島



ブナケン島はマナドからボートで 40 分～60 分の距離に位置する島でダイバーの聖地になっている。ここには多くの外国人ダイバーがいた。この人々は観光業と漁業で生計を立てているようだ。島内の移動？もボートを使うらしい。若者が「あっちの海が荒れてるから天気が悪くなる」と言った。小さな島になるほど海に深くかわった暮らしをしているように思う。

### 5. バリ島、デンパサール／ジャワ島、ジャカルタとジョクジャカルタ



バリ島デンパサール。リゾート地だけあって外国人観光客が多い。日本人も多かった。1 日だけだったのであまり見学できなかった。まさに南国って感じだった。今度はバリを回ってみたい。

インドネシアの首都、ジャカルタ。今まで訪れたどこよりも都会だった。車の量、お店の数、建物の数とても多かった。ここではインドネシアのボーイスカウト連盟へ。インドネシアの活動についていろいろお話を聞きました。また、ジャカルタにも大きな港があった。海の上に家が建っていた。



飛行機でジョクジャカルタへ。世界遺産のボロブドゥール寺院を見に行った。目の前で見たとき寺院の壮大さに鳥肌がたった。来てよかった。

3つの島をとおして、インドネシアの人々は海を愛し、ともに生きていることが分かりました。企画実施前はインドネシアの文化は全く日本と違うものだと思っていました。いろんな文化(宗教・国・音楽・食べ物など)がまじり合っていて、お互いの文化を理解し合うところが日本と同じように感じました。2枚では説明できないほどのことをインドネシアに滞在して学びました。

現在、この企画で得たことを自分だけで消費しないように、インドネシアについて知っている人も知らない人も伝えられるような新聞を作成中です。新聞作成後、学校やボーイスカウト等で配布し、多くの方にインドネシアの文化について知っていただきたいな、と考えています。最後になりましたが、インドネシアの方々、この企画にアドバイスを下さった方々、初めての 1 人旅ということで心配をかけた家族や指導者の方々、このような機会を与えてくださった国際交流奨学金財団の皆さまに心より感謝申し上げます。これらの経験をこれからの将来に生かしていきたいと思います。

2012/3/16 浅見真奈







# カンボジアで性売買の実態を学ぶ —性売買の実態や性売買の取り組みに関する調査—

東京大学 文科一類 二年 法学部内定 安藤 蘭

## 1 企画実施期間、企画実施地

2012 年 2 月 27 日～2012 年 3 月 13 日、プノンペン、シェムリアップ（カンボジア）

## 2 企画実施目的

カンボジアにおける性売買の実態やそれに対する取り組みを、主に予防・自立支援の観点から、現地で実際に携わっている方々の訪問や、更生施設への訪問を通して理解を深め、課題や可能性を考察しつつ、取り組みにおいて何が求められているのかを考える。

## 3 企画内容

性売買は人身売買の一要素であり、性売買への取り組みについては、予防・保護・自立支援の 3 段階が存在する。その中でも予防・自立支援に着目し、予防の観点からは JICA の政府レベルでの取り組みや C-Rights の取り組み、自立支援の観点からは SCSA の取り組みを調査し、加えて、現地の学生たちの考え方を知るべくジェンダー学の講義に出席した。

### 3.1 政府レベルでの動き —JICA 訪問を通して—

#### 3.1.1 JICA カンボジア事務所訪問

カンボジアにおける JICA 事業の概要説明をしていただいた。自分の興味分野は性売買ではあるものの、その問題が起こる基盤の社会について広く知っておかなければならないのは当然であり、政治、経済、社会、法律、教育、福祉等、様々な側面において、担当の方からリアルな実情を伺うことができた。主に JICA が力を入れている民法、民事訴訟法整備の持つ影響力がいかに大きいかを理解できた。その適用開始により企業誘致が促進されたというメリットがある一方で、いかに社会に適応させるかや、法曹人口教育、法律の普及活動においては、依然課題が残されている。法律という秩序の更なる整備の必要性が感じられた。また、ボル・ポト政権下が生み出した負の遺産は、決して「歴史」上のものには止まらず、現在の経済発展を妨げる原因として大きな比重を占めていることもわかり、いかにそれを克服し発展につなげていくかがカンボジアでは非常に重要視されていることも痛感した。

#### 3.1.2 NGO デスク概要説明

JICA プラザコーディネーターの小川紀子様は、性売買に携わる NGO についての説明や 4.1.1 の概要説明に対して抱いた疑問について説明していただいた。NGO 同士のぶつかり合いや活動の重複から生じる問題が、かえって活動の妨げになっていること等（例えば、様々な NGO によって行われる教員研修の多さから、結局は授業の時間が削られていること等。）問題が数多く生じているが、“やっと途上国になれたばかり”の印象が強く、今こそがターニングポイントであるカンボジアで、数多くの NGO がいかに連携を取り合うかの重要性が感じられた。

#### 3.1.3 JICA ボランティア面談 —音楽隊員の活動視察—

プノンペンでの上層教育であるマーチングの指導をしていらっしゃる西浦りか様と、指導現場のワットプノン中高を訪れた。本企画は直接的には性売買問題とは関係がないものの、プノンペンでのある程度恵まれた層の子どもたちの様子、生活の実態を垣間見ることができた。某村の学校の創設記念のための演奏会に向けて、子どもたちは皆猛特訓中で、国王の出席する儀式などで演奏を披露しているだけに、炎天下にも関わらず、一人一人が熱心に取り組む様子は立派だった。

## 4 草の根レベルでの動き

### 4.1 SCSA (Save the Children's Smile Association)訪問



SCSA はカンボジアの人身売買された子どもたち及び、人身売買されそうな子どもたちを救出し、養育しながら自立させる活動に関する事業を行っている、日本の施設であり、5 日間の日本語指導を中心としたボランティアを通して、子どもたちと直にふれ合う機会をいただいた。子どもたちはその過去を感じさせないほどいつも笑っていて、こちらが逆に元気をもらったほどであったし、日本語のレベルも高く、また編み物やヘアメイクもプロ並みで、今の段階で既に自立できそうな気配が感じられた。それぞれが将来の夢を明るく語る、そんなあたたかさの感じられる施設だった。一方で、孤児院へのツアーは禁止されている中で SCSA にツアー客訪問が絶えないことには疑問を禁じ得なかったし、所謂“あげる系”の、対象も限定的な支援に止まっている印象をも受けた。ただ、SCSA の子どもたちが社会に出る頃にはその活躍が非常に期待されるだろうと確信できた。

## 4.2 C-Rights 上田美紀様 訪問

C-Rights の、現地の NGO と提携した援助について、上田様のご経験を交えて詳しくお話していただいた。C-Rights は、人身売買予防の観点から、これまで行ってきた物資提供支援や教育・通学支援等から今では支援先家庭、団体のモニタリングを実施しており、今後は、最貧困層の家庭を対象として、日々の生活の根本的基盤を支える事業を行っていくということであった。上田様はジュネーブでのインターンの経験等、様々な角度から人身売買問題に携わってこられたが、やはり答えは「村」にあるという。村の人々がカンボジアを支える主体であり、彼らを助けるには彼らの立場に立った支援が必要で、そのためにも現地の NGO と協力して事業することは大いに強みになっているようで、またこの支援は、グループのネットワーク化により一層貢献しているようだ。一方で事業実行の立場の違いからの困難性も存在し、「自分の価値観を捨ててそこから何ができるか」考えることの重要性を感じさせられた。また、ドキュメンタリー映画によく登場するような「子を守る親」は極まれであることをも教えていただき、自分の抱いていた人身売買取引に対する誤解を解くこともできた。

## 5 カンボジア社会での反応 —Paññāsāstra University of Cambodia (PUC)の「ジェンダー学」講義を通して—

PUC で中川香須美教授の担当するジェンダー学の講義に 3 日間出席させていただいた。1 日目の講義のテーマは「あなたが首相だったら女性の地位向上のために何をしますか」というもので、男女問わず一人一人が生き生きとスピーチをする様子は印象的だった。カンボジア訪問前は、男女差別が依然厳しい社会だと認識が強かっただけに、一部の都市の恵まれた学生たちではあるも驚かされた。3 日目の講義では性売買に関するビデオを鑑賞したが、学生たちと話す機会をも設け、性売買を新聞上の問題でしか捉えていないこともわかり、カンボジアにも発していることを痛感した。また、2 日目の講義では自己紹介を交えて私の身の回りに関して紹介させてもらったが、日本の一部の女性のアクティブさには驚き、カンボジアの方が日本よりも先を行っていることを考慮すれば、日本政府は、女性の社会進出に関して実効性のある政策を打ち出していくことは勿論、闇に隠れた人身売買の実態にメスを入れ、法制度化を進めることに積極的になるべきだと考えさせられた。



また、中川教授と個別にお話した際に主に印象に残った点として、現地の NGO の職員の方には、NGO の理念のためというよりはその給料の良さから仕事を続けている人もいて、外国人職員の方が使命感が強い現状も存在していること（勿論、責任感の強く熱心な職員は多い。）、依然カンボジアは外国の支援に頼っているという側面が強く、ジェンダー問題、性売買問題に関しても自立した取り組みができるようになるまでには数十年の時間を要するだろうとおっしゃっていたことが挙げられる。

## 6 私見と結語

今回の企画では、予防・自立支援の観点から性売買の問題を調査したが、NGO 同士の連携の困難性や複雑性、プノンペン等の学生たちにとって性売買問題はあまり身近な問題として捉えられていない等地方の農村と格差があること、またカンボジアの自立した政策、事業運営達成はまだまだ遠い先のことであること等の問題が明らかになり、各 NGO 間や政府との連携の更なる整備、市民への問題の普及啓発活動、カンボジア人を巻き込んだ取り組みの必要性、重要性を痛感した。また、副次的な企画として行ったトゥールスレン博物館やキリングフィールド訪問、或いは現地の人との会話を通して、クメールルージュ時代の傷跡は昔のことではなくつい最近のこととして捉えられているのであり、その影響は人々の精神面には勿論、発展を妨げる一因としても現在に大きな爪痕を残していることを実感できた。また、単に町を歩いていても、そのゴミの多さや交通の無秩序さ、インフラの未整備さを肌で感じる事ができ、依然発展途上であることが感じられた。しかし以上のことは同時に、依然発展の可能性を大いに含んでいることを意味するのであり、その先にある政治経済的、社会的発展が、性売買抑制に大きな役割を果たしてくれるのではないだろうか。カンボジアの人々はあたたかい人たちがばかりだ。今回訪問した方々は、彼らの人生を丸ごと背負うような仕事をしているのであり、その苦勞と大変さの程度は私の想像を超えているだろう。しかし、人権という根本的で重要な問題に関わるからこそ、人身売買、性売買に真っ正面から取り組んでいくことは大事であると、本企画を通じて改めて気づくことができた。本当にありがとうございました。

第 12 回 日本人学生のアジア体験コンテスト 企画実施報告書

ラオスの農村から“エシカル・ライフ”を学ぶとともに  
開発と幸福の関係性の調査の実施

東洋大学国際地域学部国際地域学科 3 年 篠田湧

## 1. 企画の目的

本物の幸福とは何か。「物の豊かさに溢れながら心の豊かさが失われつつあると言われる日本、急激な経済成長が貧富の差の拡大を生み大きな問題となっている新興国...」。本企画ではこれらの背景をもとに、開発の進展がもたらしている問題に着目し、昨今話題となっている国民総幸福量(GNH)の考えから、東南アジア最後の秘境といわれるラオス、とりわけスローライフが色濃く残る農村部に焦点を当て、幸福度を測る調査を実施するとともに現地の生活を体感し、開発と幸福度との関係性を明らかにすることを目的とする。

## 2. 企画実施方法

対象地域としてラオス・ビエンチャン県農村部のバンホム地区を選定し、幸福度測定のため、地元住民を対象に独自のアンケート調査及びヒアリング調査を実施した(同様の調査を日本の大学生に対して実施し、ラオスとのデータと比較)。それと並行し、農作業や伝統的ラオス織物“シン”の製作体験、一般家庭での自給自足作物を使ったラオス料理などを通じ、現地の自然の摂理のもと営まれているライフスタイルを体験した。調査にあたっては、ラオス国立大学日本語学科の教員、生徒計 4 名の協力のもと実施した。

### ※アンケート設問内容(5 段階評価)

- 1) あなたは現在の生活に満足しているか?(満足度)
- 2) 国民の暮らしは良い方向に向かっていると思うか?(期待値)
- 3) 一週間に何人の近所の人と話すか?(コミュニティのつながり度)
- 4) 他国と比べ自国の文化は好きか?(文化面)

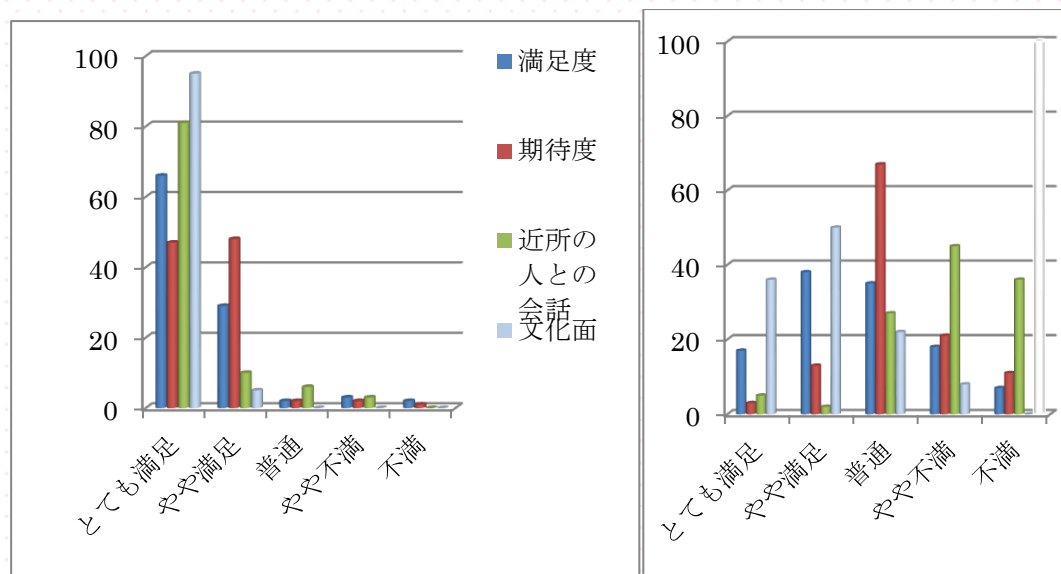
## 3. 企画調査結果

### 3-1. アンケート及びヒアリング調査

上記アンケート内容の結果を示したものが表 1 である(設問 3.近所の人との会話は左から 15 人以上、10 人以上、5 人以上、1 以上、0 人)。ラオスにおいて現状の生活への満足度、暮らしの良い方向への期待値、近所の人とのつながり、文化的充実のいずれの結果も、「満足」「やや満足」を足し合わせると 90%以上という非常に高い値となっていて、人々の内面的要素の高い充実度が感じられた。調査において、多くの住民の方が言っていた「モノが豊かでなくとも、周囲の人と互いに助け合いながら生活している」という言葉が、高い充実度、幸福度の結果につながっている大きな要点であると感じた。コミュニティ内での関わりが非常に強く、人間味ある生活が営まれていた。日本のデータと比較すると差は歴然であり、特に、暮らしの良い方向への期待値、近所の人との会話は非常に低い値になった。要因として「政治不安、年金問題、自殺数、プライバシー問題」といった回答が多かった。



表 1 幸福度調査アンケート結果(左：ラオス・バンホム地区、右：日本人大学生)



### 3-2. 現地の生活体験(一般家庭での自給自足作物の料理)、アンケート調査



## 4. 感想

今回の調査で感じたことが、ラオスの人々の純粋さと温かさです。調査に訪れた地区では村長さんも同行してくれ、村総出で協力してくれました。調査地域はコミュニティ間の関わりが強く、互いに助け合いながら人間味のある生活が営まれ、そこで築かれた人と人との深い絆の数々が彼らの幸福につながっていると感じました。人とのつながり、心の豊かさを肌で感じ、物欲に溢れすぎている私も含めた先進国の人々が人間の本質的に考えると、どこか貧しいように感じました。心の豊かさが失われつつある日本が、ラオスの人々の本物の絆の数々から学ぶべきものは多いと考えました。今回の企画を通じ非常に貴重な経験ができたことに、共立国際交流奨学財団のみなさまに心から感謝を申し上げます。



## 「インドネシア人に対する日本語教授・日本文化の紹介」を終えて

源 飛輝（東京大学大学院総合文化研究科）

インドネシアは中国・韓国・オーストラリアに次ぎ、日本語学習者が四番目に多い国だ。そうでありながら、日本語教授の人材が不足しており、筆者は此の度ジャカルタに於いて日本の言語及び文化につき理解促進の一助となる様プロジェクトを組んだ次第である。そしてこの企画を振り返るにあたり、外形的には、インドネシア人に言葉を中心として何某かの知識を与え、こちらも多くを授けられたという結果を成功裏に収めたと結論付けられよう。しかしながら個人的な収穫として特筆すべきは、ここでの経験が自らの言語に対する意識や認識に変化をもたらせるに至ったことだ。

私はこれまで母語の日本語以外に、英語と中国語を使い、フランス語を習った。そしてこれらの言語を学習していく過程はすこぶる楽しいものであったのだが、その理由は、ある土地の「言葉」という記号と、「文法」というルールを介することによって、何らかの概念なり表現が全く違った形に変容されて全く違う世界に表示されることが可能となり、そして言葉の蓄積が増えれば増える程、それが流暢に、精密になっていくことが挙げられる。そしてあたかもコンピューターにソフトをインストールするかの如く、ある特定の言語を入り口にして、自らにとって新しい文化やものの考え方に触れることができるのだ。

ただ、勿論それもさることながら、何より私には外国語を習得しようという試み自体が、美しい所作とすら思えたことが重要であった。というのも大袈裟に聞こえようが、我々が行ってきた、ある言語を外国語として勉強し解析していくという作業は、土着の民族が悠久の歴史を以って築き上げ、時代の洗礼を経て生き残った言の葉と言霊の大海原に、一定の規則性を見出し、形の無かったものに形を与え、分類し、体系化し、更新していくという代物だからである。これはまさに、立派な科学なのだ。そして自然現象とも呼べる言語活動に、理論と理屈で対峙していくという壮大な実験であり、私はその実績に魅せられた。ある外国語について知れば知るほど、勉強すればするほど、知識が増え、まるで武装されていくかのような心持ちになる。そして、該当する土地では該当する言語のプラットフォームの上でこそ、歴史なり文化なり経済なり政治なりが走ってきたのであって、その異世界を支えるインフラたる言葉に対して、アウトサイダーたる自分がそのバックグラウンドとアイデンティティと思考回路を携えて挑戦することは、まことに有意義に感じられたのだ。異論はあろうが、少なくともこれが学校で今日まで外国語を勉強してきた私の外国語観の根本であり、だからこそインドネシアを訪問する以前からインドネシア語の世界に実地で踏み入れることを心待ちにしていたのだ。

さて、格好を付けてこのような綺麗事を口にしてはいたわけだが、実際のインドネシアでの経験から事情は少々変わってきた。といっても、価値観の根本が大転換してしまったわけではないのだが、外国語学習につき、捉え方に明らかな進展が見られたのだ。

なぜ「インドネシア人に日本語を教えて、同時にインドネシア語を教わる」という今回の言語体験で私がそこまで感動したか、感銘を受けたかという点、以下の通りである。

中学校入学以来、学校で外国語を習ってきた私は、日本人の教師から日本語で英語（及びその他言語）を習う「文法訳読教授法（Grammar-Translation Method）」に馴れ親しんできた。また、外国人に日本語を教えていた経験もあるが、その際は私も相手の母語をある程度習得しており、それを使いながら日本語を説明するという状態にあった。しかしながら、今回は日本語を、ネイティブスピーカーである私が徹頭徹尾日本語のみで教えるという「直接教授法（Direct Methods）」を採用したのである。これまで自分自身が全く知識の無い言語を母語とする相手に日本語を教えたことが無かったことに加え、ことさら新鮮に感じられたのは、日本に住んでいない人、はたまた日本に行ったことも無い人に日本の外で日本語を教えるという初めての経験であった。前述の文法訳読教授法で教えられ教えてきた私としては、全く新しい試みであったのだが、発見としては、生徒側が母語での解説という助けの手を差し伸べられることは有り得ないと覚悟できているので、最初は戸惑う場合もあるが結果的

にコミュニケーションが積極的になるということが挙げられる。そして「何とか伝えなければならない」「もっとうまく意思疎通できないものか」と生徒達も一生懸命になるので、記憶にも定着し易いように見て取れた。また、一切の「甘え」が完全に取り払われるので自らが持ちうる限りの日本語をフル活用して頭を捻った上で解に辿り着くことから、日本語の吸収が非常に良質なものとなっていた。何より、双方が楽しいのである。同じ内容を取り扱ったとしても「教授」という一方通行性ではなく「コミュニケーション」という双方向性のやり取りが場を支配していることが決定的であったように思われる。こうしたことから改めて、言語や言葉というものはコミュニケーションの達成や成功の為に存在しているのであって、本来的には情報発信者たる自分と受信者たる相手がいて初めて意義を有するものだということを皮膚感覚に落とし込むことができたのである。

翻って、私はインドネシア語を教えてもらったのだが、初めて一度も教室で習ったことの無い言語を、最初から現地という環境でネイティブスピーカーから手解きされるという経験であった。そして、日本語を教えている時間を除けば、朝に起床してから夜に就寝するまでをインドネシア語でなんとかやっていかなければならないという強迫観念にも似た感覚に襲われており、インドネシア語の用法を間違っても「恥ずかしい」などという気は更々起き無かった。たどたどしいながらも自己主張することが大事で、純粹に思いを伝えることに脳と口が集中したのだ。結果として、これらが相俟って、今までになく効率の良い言語学習が可能となり、我ながら非常に驚いた。効果は刮目に値するものであった。

このように日本から遠く離れ、会話もままならなかった異国での経験を通じて、言語の捉え方がテクニカルからより根源的なものに移り、「言葉は活きているものだし、生きる為にある」こと、言語を扱う上では何よりも先ず想いの発露と傾聴が大前提にあること、が胸に刻まれた。それは、ジャカルタを発つ前に「今隣に立っているインドネシア人に、このインドネシアの彫刻を見て覚えた感動を、伝えたい」というシンプルな動機から「綺麗！」とインドネシア語で話しかけ、二人とも笑顔になったことに象徴されたように思える。



# アジア体験実施報告書

## “インドネシア・バンジャルマシンのイスラームと精霊信仰の関係”

### —中東・北アフリカ・日本との比較—

上智大学総合人間科学部教育学科3年 宮崎響  
(専攻: 教育哲学・副専攻: 東南アジアの政治・歴史和解)

#### 1. 調査の詳細テーマ、日程、方法、場所

・調査の詳細テーマ: 『川と木〜住居・モスク〜』に特化してバンジャルマシンのイスラームと精霊信仰の関係を考察

・日程: 2012.2/20～3/1

・方法: 現地の人々への聞き取り、現地の図書館で文献調査、博物館・美術館の見学、建物等の見学

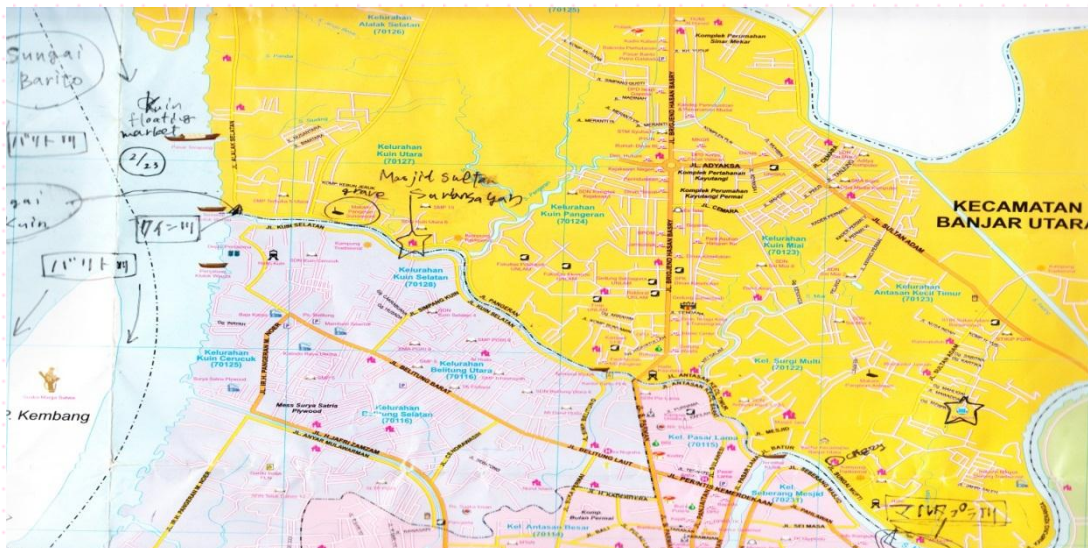
・場所: インドネシア、南カリマンタン州、バンジャルマシン

バンジャルマシン—面積: 74km<sup>2</sup>/人口: 625,395人(2010年調べ)

愛称: バリト川・マルタプラ川の合流地点にあり、「川の都」「東洋のヴェニス」と呼ばれる

宗教: 96%—イスラーム/4%—その他(プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー、仏教)

《地図》下記載のバリト川、マルタプラ川、クイン川等の川が人々の生活を支える



《川》・マルタプラ川 (Sungai Martapura)



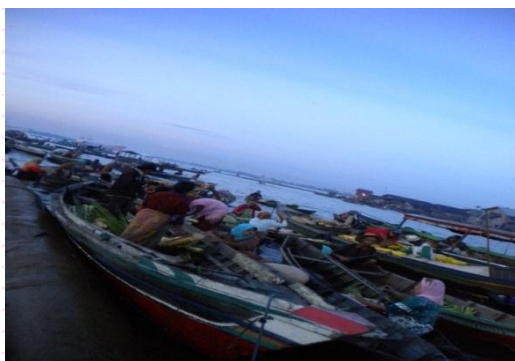
- ・バリト川 (Sungai Barito) 【写真左：輸出される石炭、右：バリト川にかかる橋】



- ・クイン川 (Sungai Kuin) 【写真左：川の上に立つモスクと住居、 右：住居群】

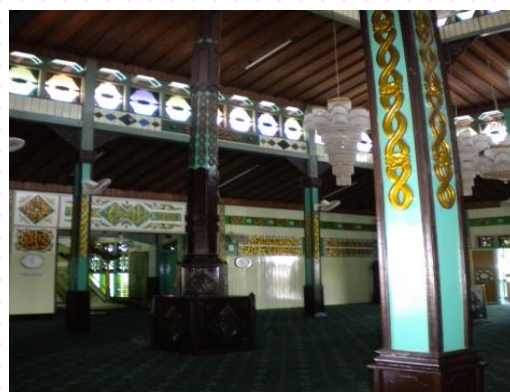
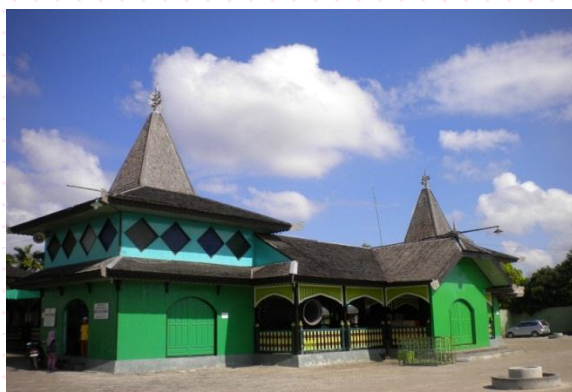


- ・クイン水上マーケット 【写真左：朝7時くらい、 右：朝5時半くらい】



#### 《モスク》Masjid Sultan Suriansyah

(南カリマンタン最古のモスク・木造で Kayu Ulin がふんだんに使用されている) 【写真左：正面、 右：内部】





《その他》・ Wahyu Nugroho 氏の住居（1928 年に建築され、現在も Wahyu 氏が生活する住居）

【写真左：現在の所有者、wahyu 氏と。5 人で暮らす／右：外観】



## 2. 調査報告・概要

### ① バンジャルマシンの人々とイスラーム（中近東、北アフリカとの比較）

【聞き取り、バンジャルマシンの人々を観察して】

	バンジャルマシン	サウジアラビア
女性のスカーフ・ヒジャーブ等の着用	任意・自由 実際に着用していない女性も半数ほど見かける モスクや廟に入るときだけは必ず着用	アバヤと呼ばれる足首丈の黒い上着と頭部を覆うスカーフを着用義務あり
男女性の隔離	なし 女性の車やバイクの運転、仕事も自由	あり 女性は、家族以外の男性と話すことは禁止
男女交際	婚前交渉や肌に触れることは禁止だが、それを守れば交際は自由 (結婚までに平均で5人ほどと関係をもつらしい)	家族以外の男性と話すことは禁止 ⇒男女交際は禁止
結婚	自分自身でパートナーを決める・恋愛結婚多い	親同士で取り決められる
家族	家族内の関係は平等 家族への愛は強い (最も大事なものは家族、次に仕事や友人・・・と答える人が多かった)	父系家族 男性・年長者が絶対で、尊敬される 家族や親族等の血縁への愛は強い
モスク	・材料：木造がほとんど (Kayu Ulin, Kayu Galam というバンジャルマシン原産の木材を使用) 規模の大きいものは大理石などの石を使用 ・非ムスリムの入場：可能 (私が行った限り、できないところはなかった) 調査にも協力的な対応をしてくれる 写真撮影も快く許可・資料などの提供もしてくれた	・材料：大理石、石、レンガでの建築 ・非ムスリムの入場：できないところも多い (サウジアラビアに限らず、多くのイスラーム国家では・・・)

特徴 まとめ	目に見えないものや信仰を重視 <b>“DARI HATI (in heart,心から)”</b> (人々のよく口にしていた単語) 「実際にヒジャブをしてなくてもいいんだ。 心にヒジャブをつけていればいいじゃないか。 <b>“DARI HATI” だよ</b>	目に見えるもの（アバヤ、男女の隔離等）の重視、忠実
-----------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------

## ② 川とバンジャルマシンの人々の生活 【聞き取り・見学によって】

「バンジャルマシンの人々と川」と 2011 年 3 月に行った「インド人とガンジス河」の関係の比較

	バンジャルマシン (イスラーム)	インド人とガンジス河 (ヒンドゥー教)
川と生活	住居、モスク、学校等の建物(川の上にある)、 交通機関、海外への交易の場、商売の場、風呂、 歯磨き、トイレ、洗濯、涼む場所、遊び場、 釣りの場…等々 <b>“生活のすべて”</b>	商売の場、風呂、歯磨き、トイレ、洗濯、 涼む場所、遊び場、釣りの場、祈りの場 …等々 <b>“生活と祈りの場”</b>
川への思い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・重要な生活の礎</li> <li>・祖先からの伝統である</li> <li>・愛しているが、信仰の対象ではない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛している、誇りに思っている</li> <li>・ヒンドゥーの信仰対象</li> </ul> <b>“manma Ganga (母なるガンジス河)”</b> という言葉多用 <ul style="list-style-type: none"> <li>・信仰の対象でもあるため、インド人の観光名所ともなっている</li> </ul>
インド人とガンジス河の関係と 自分とバンジャルマシンの川について	全く異なる インド人にとってガンジス河は信仰の対象であるが、 こちらは決して信仰の対象ではない ただの“生活”の場である	—
川への祈り、 川での祭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・祈り：なし</li> <li>・祭：毎年 8/17 のインドネシアの建国記念日の祭と断食明けの祭の際に川に龍やサルの頭のついた船が行き来する</li> </ul> ⇒川に対する祭ではなく、盛り上げるための手段である	毎晩、ブジャーというガンジス河への祈りが川岸で行われる バラモンの青年たちが祭を執り行う インド人は手拍子したり、歌ったり、祭のような賑やかさである ⇒ガンジス河に対する祈り
川への信仰	川への信仰は否定 川の創造主・神に対して感謝し祈るという思考	河への信仰あり “インド人の母”として崇拝する
まとめ	生活の場であり、信仰の対象ではない 信仰の対象は唯一神のみ	生活と信仰の混在 ヒンドゥーの象徴

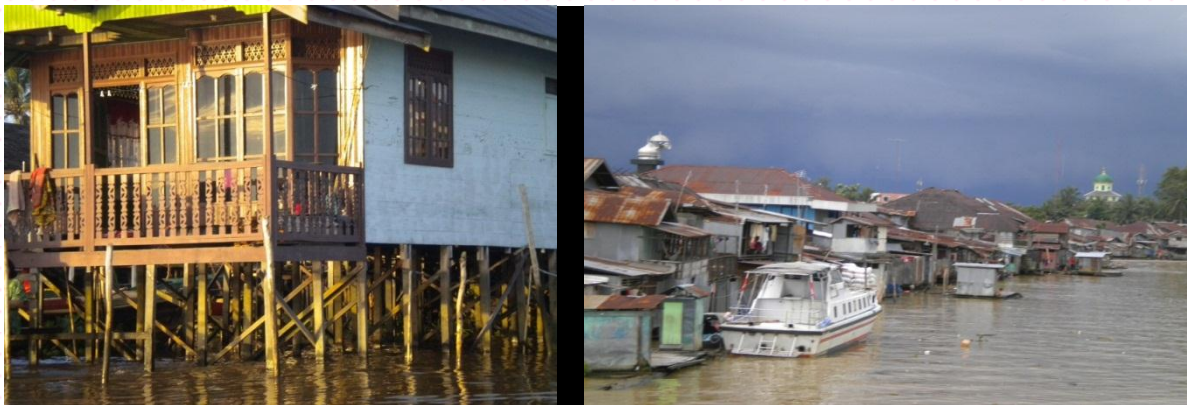


### ③ バンジャルマシンの人々の木～住居・モスク～

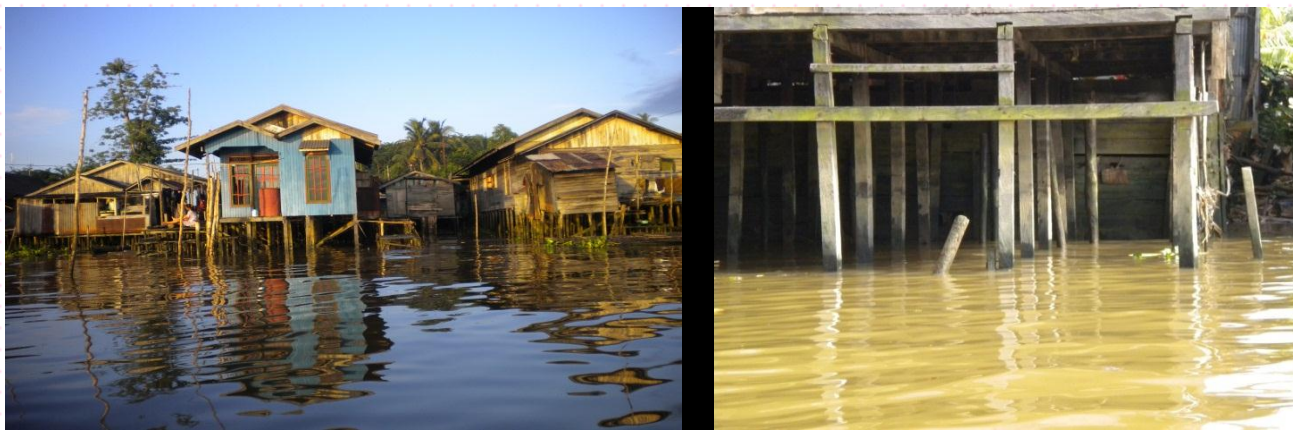
【建築士 Syuhudul Ichasan への聞き取り・図書館での調査】

疑問：バンジャルマシンの人々の川との生活を支える、川の上に立つ木造の住居の構造はどうなっているのか？  
また、セメントや石などが使用されず、木だけで土台もまかなわれているので、腐敗の心配はないのか？安全なのか？木造建築が多く、木にも恵まれた場所なのか？

【写真左：バリト川の上に立つ住居の写真、右：マルタプラヤ川の住居群】



【写真左：バリト川住の居群、 右：クイン川の住居の下支柱部分・木のみで支えられている】



⇒結論

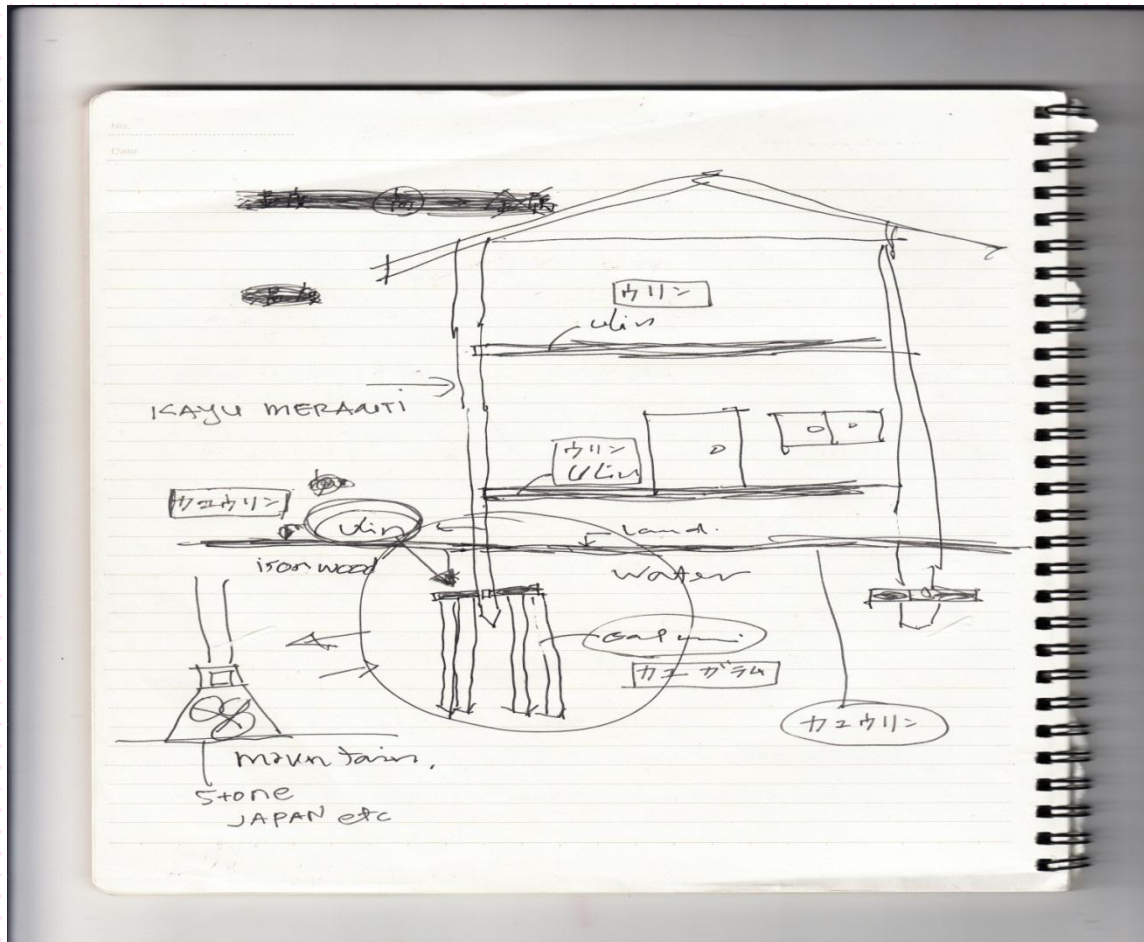
【写真：Syuhudul 氏にバンジャルマシンの建築方法について教えてもらう】



家のおおまかな構造（絵：建築士 Syuhudul Ichasan）

図の黒塗り部分が Kayu Ulin（床や土台に使用されることが多い）

下部（土台部分）が Kayu Galam（土に立てられ家の土台部分に使用される）



【場所：建築士 Syuhudul Ichasan の指揮する建設現場

写真左：土台の工事の様子、右：土台部分に使用される Kayu Galam（携帯と大きさ比較）】



＊Kayu Galam

- ・代表和名：カユプティ（フトモモ科メラレウカ属）
- ・主たる分布：インドシナ地域、インドネシア、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア
- ・樹種解説：常緑高木。樹高 15-30m。マレー・インドネシア語で「白い木」という意味で、その名の通り、樹皮は白色をしている、また厚く、剥離する。葉は、互生、長楕円形、全縁、革質。生命力が強く、周りの



植物を駆逐しながら繁殖地を広げる。心材は桃褐色、耐久性があり、白蟻に強い。

参考・引用：<http://www.woodstar.biz/jp/wamei-572.html>

建築士 Syuhudul Ichasan 曰く、

『kayu Galam は水を吸収して、2 倍ほどに膨張する。そして、最低でも約 15～20 年間は建て替え不要である。日本やその他の多くの地域では、土台に石を使う。しかし、バンジャルマシンではそれが不可能だ。なぜなら、もし川の上で石を土台に使用したら、沈んでしまうんだ』

【写真左：右の黒っぽい木が Kayu Ulin 右：Masjid Sultan Suriansyah の見事な模様が施された床・Kayu Ulin】



＊Kayu Ulin

- ・代表和名：ビリアン（クスノキ科 Eusideroxylon 属）
- ・主たる分布：フィリッピン、インドネシア、マレーシア
- ・樹種解説：中型の木で、樹高 30m、樹周 1.8m。。カリマンタンで重要な用材となる木である。かなり豊富で、海拔 500 フィートまで生育していて、しばしば群生している。材は乾燥が遅く、曲りや干割れを生ずる。非常に強い木材で屋外で、非常に耐久力がある。経済ベースで考えると、木材の中で最も耐久性があると考えられる。また白蟻および海中木食虫に、非常に抵抗がある。切断木口面は光沢がある。用途は屋根板、重構造用材、波止場材、橋梁材、海水用杭電柱類、ボート樽類、割り箸など。

参考・引用：<http://www.woodstar.biz/sn/scientific-412.html>

建築士 Syuhudul Ichasan 曰く、

『Kayu Ulin は、床や Kayu Galam の土台の上部に使用される。大変丈夫な木材である。しかし、長年の輸出過多が原因で減少傾向にあるので、値が吊り上がってきている』

《まとめ》

日本人である私は、セメントや石などを利用しないと、逆に腐敗するのではないかと安全性は確かなどといった不安があったが、それは要らぬ心配だったのだ。川とともに生活するバンジャルマシンの人々の住居にはその土地の材料・木材を使用した建築方法が脈々と受け継がれている。

そして、バンジャルマシンには、川だけでなく、Kayu Ulin、Kayu Galam という木にも恵まれている。人々の生活は、豊かな自然と密着している。

### 3. 調査報告・まとめ

#### ①中東、北アフリカとのイスラームとの比較—信仰、自然環境の視点から—

バンジャルマシンの中東、北アフリカのイスラームの大きな違いは、女性のヒジャブの着用や男女交際、男女の隔離の点である。

しかし、考察していくと、この違いはイスラーム（宗教）におけるものなのではなく、地域の環境・歴史の違いであるという結論に至った。

なぜなら、バンジャルマシンでは男女関係なく、住居の目の前にある川に入り、泳ぐ、風呂として利用する。万人に開かれた川の前では、男女別で…などと言ってはられない。またもちろん、女性も川で髪の毛を洗うために、髪は自然と露わになる。そこでは、女性の髪の毛の神聖視・女性の象徴という思考は生まれない。隠すからこそ、見えないからこそ、人間の想像力は働き、神聖視されるのだ。ゆえに、川の都・バンジャルマシンでは、男女隔離や女性のヒジャブの着用が重要視されないのだ。

次に、住居においてだが、バンジャルマシンの住居には女性を隠す、または隔離する空間がないのである。なぜなら、住居には、部屋の明確な区切りもなく、天井も高く、開放的な空間が広がっているのだ。このような住居構造だからこそ、年中蒸し暑いバンジャルマシンでも、屋内で涼しく暮らせるのだ。私自身、(上記の) Wahyu 氏の自宅に入った瞬間の涼しさと Kayu Ulin 製の床のひんやりした心地よさに大変驚いたものだ。(冷房や扇風機なしにもかかわらず) 住居構造や気候からも、人間が閉鎖的な空間に長時間いることは不可能である。ゆえに女性の隔離が行われず、いや、できないのだ。

このように、川と住居の二点から考察すると、逆に中東・北アフリカは女性のヒジャブの着用や男女交際、男女の隔離のことも推測できる。ヒジャブの着用は、高温で乾燥した砂漠地帯で女性の肌を守るためであり、男女交際や隔離は、以前、部族社会であった時代の「女性は財産である」という歴史の名残なのだろう。

これは良い悪いといった善悪二元論では判断できないし、判断すべきでもない。その地域の伝統であり、歴史であり、生きる知恵なのだ。

#### ②バンジャルマシンのイスラームと精霊信仰の関係性

初めに精霊信仰とは・・・岩田慶治氏の精霊信仰についての説明を引用したい。

**アニミズムと呼ばれている宗教がある。**

この耳慣れない言葉を理解するためには、日本古代の神々について述べた『古事記』の文章が参考になる。つまり、その当時は「草や木がそれぞれに言葉をしゃべり、国土のそこそこで岩や、石や、木や、草の葉がたがいに語りあい、夜は鬼火のようなあやしい火が燃え、昼は群がる昆虫の羽音のように、いたるところでにぎやかな声がした」というのである。人間生活をとりまくすべて、生物も無生物も、それぞれに魂をもち、言葉をかわしていたというのである。こういう自然と神のとらえ方、それを一般にアニミズム、精霊信仰と呼んでいる。

【P.92 / 『カミと神 - アニミズム宇宙の旅 - 』（著）岩田慶治、1989 年、講談社 】

2. ②川とバンジャルマシンの人々の生活、③バンジャルマシンの人々と木～住居・モスク～の章からも分かるように、バンジャルマシンは川や木（木材）などの自然に恵まれた環境である。現在も、自然と共に生活している（せざるをえない）人々は、上記の精霊信仰を基盤に信じているのではないのか…というのが私のテーマであった。

そして、実際に彼らの生活を見たり、聞いたりをしていると、「川や木を愛しているが、精霊信仰や多神教の信



仰は持っておらず、信仰の対象は神（Allah）だけである」と、精霊信仰に対しては断固否定する。しかし、私にはイスラームの教えにおいて、スカーフや男女交際などのような“目に見える”教えではなく、目に見えない**“DARI HATI(in heart)”**という信念を大事にすることは、精霊信仰であるとは言い切れないものの、彼らの生きる豊かな自然環境に由来するのでは、と推測する。

『カミの誕生 原始宗教』で岩田慶治氏は、東南アジア（タイやラオス）と日本の信仰の歴史を比較考察し、こう述べている。（引用部分の「ここ」は東南アジアと日本のことを指す）

ここでは、「柄」、つまり、「カミのパターン」ではなくて、「地」、つまり「カミの容れもの」が受け継がれ、大切に守られとおしてきたのである。ここでは、「文化」ではなくて「自然」がより直接に民族の精神生活を支えてきたし、ここでは「文化」ではなくて「自然」がより直接に民族の生活を支えてきたし、民族生活の事実を離れて複雑な教理は発展しなかった。ここでは、個におけるカミの自覚は常に大地とともになされてきたのである。

【P.219／『カミの誕生』 岩田慶治、1990年、講談社】

これはタイやラオス、日本だけでなく、バンジャルマシンにも同様に言えるのではないだろうか。バンジャルマシンでは、仏教、ヒンドゥー教、イスラーム、オランダの統治といった「柄」、「カミのパターン」は時代によって変遷してきた。しかし、川や木といった自然、「地」、「カミの容れもの」は脈々と受け継がれている。川や木への感謝や愛情は、自然に対する直接的な信仰ではないものの、形を変え、**“自然の創造主・Allah”**への感謝や祈りへととなっている。

私はバンジャルマシンにおいて精霊信仰の全貌を見ることはできなかった。しかし、“DARI HATI”から片鱗を垣間見ることはできたのでは、と考える。

### ③日本との比較～「生きること」と「住まうこと」～

今回、バンジャルマシンを調査して、「生きること」と「住まうこと」について考えさせられた。バンジャルマシンの人々にとって、この世界で「生きること」と「住まうこと」が陸続きで、ほぼ同質なものだった。言いかえるならば、「生きること」の中に時間軸としても空間軸としても「住まう」ということが泰然と存在しているのだ。空間と時間の土台の上に人々の身体と感情が影響を与えつつ、そこを住空間にしていく。これは空間、時間双方に共通して存在する、万人に開かれた“川”という要因によるものが大きいだろう。そして、また、人々は、世界の空間と時間の土台を超越した“神”、それはもちろん目に見えない**“DALI HATI”**な関係性さえも持っているのだ。

一方、日本では、「生きること」と「住まうこと」の乖離が甚だしいように見える。時間軸と空間軸のなかで、人々が身体と感情で世界に対して、働きかけをしても、あまりに日本のシステムは巨大で複雑で一方的なため、微小な変化しか感じられない。そして、当然のように人々はその変化に気付かず、いや、あえて無関心を決め込むことによって、日々のタスクをこなす。東日本大震災で明らかとなった日本の原発に対してもそう（だった）のではないだろうか。「生きる」・「住まう」ために必要な電力を「住まう」こととはかけ離れた・巨大で複雑な、人間の扱いきれない原子力発電に依存する。「生きる」中で、自分自身の身体と感情によって働きかけを行い、「住まうこと」を放棄する。

ユダヤ人の思想家ハンナ・アーレントは、著書『人間の条件』で、「公共の場で活動すること（action）の重要性」を訴えた。この活動とは、ひとことというならば、公共の場で、自分の存在を明らかにして、自由に意見を

発言し合うことである。これこそが、「生きること」と「住まうこと」に溝のできた、現在の日本において必要なことではなかろうか。

現代は、彼女のいうようには、厳密に公的領域と私的領域を区別はできない。そして、私はあえて区別しなくてもいいのだと考える。公私の空間が分離不可能になった現代だからこそ、私的領域の中から公的領域を発展させることが可能なのではないか。たとえば、現在発展してきているシェアハウス等は、家族以外の他人との共同生活の空間である。シェアハウスで個別差があるにしても、地域や世界、様々な分野・年代・人々に開かれた新たな公共空間が生まれてきている。また、シェアハウスは、やり方次第でその可能性を無限にもっているものだと考える。国や自治体のつくった既存の公共の場には、人々の入りこむ隙もなく、新たな公共をつくりだすことも不可能に見える。だが、シェアハウスという開かれた公共空間で、顔の見える自分として、自由に発言し、活動する。そこは「生きること」と「住まうこと」、そして「新たな公共」が“今ここで”繋がる空間である。今という瞬間を、ここという限定的な空間で、すなわち、「アウラな」予測不可能な活動（action）が行われる。今後、更にシェアハウスが発展していく中で、私的空間ではなく、日本の「タコ壺文化」を（＊１）変容するような、「生きること」、「住まうこと」とが繋がる、新たな「アウラな」公共空間をつくりだしていくべきだ、そして、それが可能であるはずだ、と私は考える。

（＊１）丸山真男『日本の思想』P.64、1961年、岩波書店から引用

「このごろ、『タコ壺文化』と『ササラ文化』という比喩でもって、基底に共通した伝統的なカルチュアのある社会と、そうではなく、最初から専門的に分化した知識集団あるいはイデオロギー集団が形成されない社会とを典型的に区別し、日本を日本を後者の典型に見立てたことがある」

#### 【参考文献】

- ・岩田慶治『カミと神 - アニミズム宇宙の旅 - 』1989年、講談社
- ・岩田慶治『カミの誕生 - 原始宗教 - 』1990年、講談社
- ・ヘルマン・シュミッツ 編・小川侃『身体と感情の現象学』1986年、産業図書
- ・梶谷真司『シュミッツ現象学の根本問題 - 身体と感情からの思索 - 』2002年、京都大学学術出版会
- ・Hannah Arendt “THE HUMAN CONDITION” 1998, University of Chicago Press
- ・ハンナ・アーレント『人間の条件』 訳・志水速雄 1994年、ちくま書店
- ・丸山真男『日本の思想』1961年、岩波書店